

ケバル川のほとりで

[聖書]エゼキエル書 1章 1～21節

第三十年の四月五日のことである。わたしはケバル川の河畔に住んでいた捕囚の人々の間にいたが、そのとき天が開かれ、わたしは神の顕現に接した。それは、ヨヤキン王が捕囚となって第五年の、その月の五日のことであった。カルデアの地ケバル川の河畔で、主の言葉が祭司ブジの子エゼキエルに臨み、また、主の御手が彼の上に臨んだ。

わたしが見ていると、北の方から激しい風が大いなる雲を巻き起こし、火を発し、周囲に光を放ちながら吹いてくるのではないか。その中、つまりその火の中には、琥珀金の輝きのようなものがあった。またその中には、四つの生き物の姿があった。その有様はこうであった。彼らは人間のようなものであった。それぞれが四つの顔を持ち、四つの翼を持っていた。脚はまっすぐで、足の裏は子牛の足の裏に似ており、磨いた青銅が輝くように光を放っていた。また、翼の下には四つの方向に人間の手があった。四つとも、それぞれの顔と翼を持っていた。翼は互いに触れ合っていた。それらは移動するとき向きを変えず、それぞれ顔の向いている方向に進んだ。その顔は人間の顔のようであり、四つとも右に獅子の顔、左に牛の顔、そして四つとも後ろには鷲の顔を持っていた。

顔はそのようになっていた。翼は上に向かって広げられ、二つは互いに触れ合い、ほかの二つは体を覆っていた。それらはそれぞれの顔の向いている方向に進み、霊の行かせる所へ進んで、移動するとき向きを変えることはなかった。生き物の姿、彼らの有様は燃える炭火の輝くようであり、松明の輝くように生き物の間を行き巡っていた。火は光り輝き、火から稲妻が出ていた。そして生き物もまた、稲妻の光るように出たり戻ったりしていた。

わたしが生き物を見ていると、四つの顔を持つ生き物の傍らの地に一つの車輪が見えた。それらの車輪の有様と構造は、緑柱石のように輝いていて、四つとも同じような姿をしていた。その有様と構造は車輪の中にもう一つの車輪があるかのような姿であった。それらが移動するとき、四つの方向のどちらにも進むことができ、移動するとき向きを変えることはなかった。車輪の外枠は高く、恐ろしかった。車輪の外枠には、四つとも周囲一面に目がつけられていた。生き物が移動するとき、傍らの車輪も進み、生き物が地上から引き上げられるとき、車輪も引き上げられた。それらは霊が行かせる方向に、霊が行かせる所にはどこにでも進み、車輪もまた、共に引き上げられた。生き物の霊が、車輪の中にあつたからである。生き物が進むときには車輪も進み、生き物が止まるときには車輪も止まった。また、生き物が地上から引き上げられるとき、車輪も共に引き上げられた。生き物の霊が、車輪の中にあつたからである。

[序] バビロンの捕囚

10月になりました。今月の聖書の学びは**エゼキエル書**です。8月9日に学んだ預言者**エリヤ**、**エリシャ**はサマリアを都とする北王国で活躍した預言者でしたが、北王国はエリシャの死後70年程後の紀元前721年に**アッシリア**によって滅ぼされてしまいました。

一方エルサレムを都とする南王国ユダは、**紀元前597年**に、アッシリアの後に興った**バビロン**によって占領され、ヨヤキン王以下、祭司、役人、軍人、技術者等の主だった者たちが捕囚としてバビロンに連れていかれました。その中に**エゼキエル**もいました。これが**第一次捕囚**です。

そして、その後で王となった**ゼデキヤ**も治世9年にバビロンに反旗を翻し、2年後の**紀元前587年**にエルサレムの都もろとも神殿をも破壊され、ゼデキヤ王以下、貧しい者以外の者が皆バビロンの捕囚になり、ユダ王国は滅びてしまいました。これが**第二次捕囚**です。彼らが祖国に帰還出来たのは、70年後です。

今月は第一次捕囚でバビロンに連れて行かれたエゼキエルの預言を学びます。

[1] 捕囚生活に打ちのめられた若き魂

第1章冒頭の書き出し。「第三十年の四月五日のことである」「ヨヤキン王が捕囚となって第五年の、その月の五日のことであった」。ヨヤキン王以下の第一次捕囚はBC597年ですから、5年目とはBC 593年ということになります。すると第30年とは？いろいろな説がありますが、私はエゼキエルの年齢だと受け取ります。主イエスが宣教活動を開始されたのも30才の時でした(ルカ 3:23)。

もしもエゼキエル 30 才の時だとすると、彼は 26 才で捕囚となり、バビロンに連れて来られたこととなります。祭司の家に生まれ、いよいよ伝統のあるエルサレムの神殿で祭司としての務めにつこうとしていた時です。遠い異国での捕囚生活が始まりました。愛する民族の将来はどうなるのでしょうか。そしてこの自分はどのような生涯をたどるのでしょうか。

捕囚生活それ自体は、首都バビロンから 100km ほど離れたニップルという町で捕囚の民がまとまって暮すことが許されていまして、さほど不自由ではなかったようです。しかし歴史は、5年後には都のエルサレムも神殿も破壊され、王国は滅亡する情勢へと進んで行きます。若い魂に、絶望の暗雲が色濃く覆い始めていたのではないのでしょうか。

私は敗戦の1年前、肺結核で小学校6年を休学中に東京から両親の一族が暮す北海道に疎開し、大空襲で逃げまどうことも経験せず、平穏な 1 年半を過しました。ですから村の小学校6年をやり直している時に 8 月 15 日を迎えました。

日本が戦争に負けるや、夏休み明けの学校で真先に私たちがさせられた作業は、習字の墨と筆で教科書の誤りの記事を先生の指示に従って黒く塗りつぶすことでした。或るページは真っ黒になりました。「自分たちは、間違っていたことをこんなに教えられていたのか」と愕然としました。そして、「どんなに時代が変わろうとも変わらない、本当の真理を学ばなければならない」という思いが、心の底から、ふつふつと湧き上がってきました。

東京に戻って来て中学生活が始まりました。軍人になって天皇に命を捧げる人生の目的を失いました。そこで友達と読書会を作り、本を読み合いました。「日本は聖書に負けた」という言葉を読んで、聖書を手にしりましたが、読んでも理解出来ません。友人が通う教会に連れて行ってもらいました。それが東京の目白ヶ丘教会です。そこで礼拝の説教を聞きながら、聖書を読んでいきました。そしてイエス・キリストを救い主と信じてバプテスマを受けたのでした。

しかし私は、戦争そのものによって生活を激変させられるという体験をしていません。川越教会の皆さんは、どのような敗戦体験をお持ちですか。以前に小山さんの証を礼拝でうかがいましたね。私たちの間では一番激しい体験ではないかと思います。そこでお許しを頂いて、もう一度私の口か

らご紹介させていただきます。

[2] 小山禎兄の敗戦体験

敗戦当時、私たち家族は北満州（現中国東北部）の長野県農業開拓団にいました。農産物の生産拡大を強く奨励されて多くの開拓農民が点在していました。大平原の彼方、地平線に大きく真っ赤な太陽が沈む様は壮観で、頭上に飛び交う渡り鳥の見事な編隊は見惚れる程です。ここで父親は学校長を勤め、母親も教鞭をとっていました。

突如としてソ連軍の強力な機甲部隊が、ソ満国境を越えて侵攻してきたのです。

最強と言われた関東軍は全くの「幻」でした。作戦と称して真っ先に撤退し、民間人は取り残されてしまいました。当時、私は小学校 1 年生でしたが、緊迫した状況をハッキリ記憶しています。

8月9日、県公署からの避難命令で、自爆覚悟で老人・婦女子らが16名で、2台の牛車に分乗し、最小限の食糧と衣料品を持って開拓団を離れました。しかし途中、雨の中で1台の牛が疲労の為に乗り込んでしまい動きません。やむなく大人は泥道を徒歩で進み、ようやく遼河のほとりに着きました。

しかし降り続く雨で、泥水が凄い勢いで流れており、渡ることが出来ません。橋は日本軍が爆破して撤退していきました。有り金を払って中国人の舟を借り、老人・子どもと濡れた米を乗せて、大人は手を取り合って濁流を渡りました。荷物は此処で、みな捨てました。

鉄嶺には8月15日に着きましたが、駅には汽車の影もなく、軍人の家族を乗せて出た後でした。その地で厳しい抑留生活が始まりました。鉄嶺の校舎も、日が経つにつれて避難民が多数ですし詰め状態となり、病死者が続出します。一部の者達は、鉄嶺の西にある満鉄独身寮へ、そして鉱粉会社の寮の空き家に移転しました。そこは窓ガラスがなく、畳もなく、麻袋を拾い集めて布団代わりにし、畑に取り残されていた野菜の茎や、大豆を拾っては飢えを凌ぎました。寒さのために死ぬ子どもが出ました。

今日の一日をどう生き抜くかという日々、幼い私も飴売りの行商に毎日出かけたことを思い出します。約一年後にやっと母国へ帰国することになりました。昭和21年6月10日の午後、上陸用舟艇に乘せられて胡蘆島の埠頭を離れ、アメリカの輸送船で18日に佐世保に入港。その間に船の中で亡くなる人も多く、日によっては10人も水葬にされました。

伝染病の発生で博多港に送られて10日間程沖合いに停泊し、消毒や予防注射を受けました。父親は既に犠牲となり、命からがら母子4人でようやく故郷の信州・松本に、着の身着のままのボロを纏った哀れな風体でたどり着きました。でもそこでも戦後の厳しい生活が続きました。———外地暮らしをしていた方たちは、生きて帰られたのが不思議な位の、苦難を経験されたのですね。

[3] 神の働きかけ

さて30才になった祭司の子エゼキエルは、捕囚の地バビロンのケバル川のほとりでただずんでいた時に、不思議な霊的体験を与えられました。激しい風が大きな雲を巻き起こして吹いてきたのです。雲は火を発し、光を放っています。火の中に琥珀金の輝きのようなものがあり、また4つの生き

物の姿がありました。その生き物にはそれぞれ**4つの顔**、翼、手、足があります。正面の顔は**人間の顔**、左右は**獅子**、牛、後は**鷲**の顔。向きを変えずに自由に四方に進めます。また体の下には四方に進める**車輪**がついていて、霊が行かせる所に自由に移動できます。生き物の姿は**燃える炭火・松明**のように輝いて行き巡っていました。

大きな**翼**が羽ばたく音は全能の**神の御声**のように聞こえます。生き物の頭上の大空にサファイヤのように見える**王座**と、虹のように**光を放つお姿**が見えました。これが神の栄光の姿の有様で、エゼキエルはその場に平伏しました。そして語りかける**神の声**を聞きます。こうしてエゼキエルは、神の語りかける言葉を聞いて人々に語る、**預言者としての任務**を与えられたのでした。

エゼキエルが経験したこの霊的体験は、彼にとってどのような意味をもつものだったのでしょうか。先ず、火や光を発する雲——これは現在の境遇と将来に希望が見出せず、意気消沈し、絶望に呑み込まれようとしている若者に、**希望と意欲と喜び**をもたらす**神の迫り**をあらわしているのでしょうか。

四つの顔を持つ不思議な生き物。獅子は**勇気**を、牛は**力**を、鷲は大きな翼で大空を駆け巡る**自由さ**を。人間の特色は、**理性**、**知恵**でしょうか。更に仕事をする手、四方に動ける足、更により自由に動き回れる車までついている体。若いエゼキエルは、捕囚生活によって、余程心身の行動の**不自由さ**を覚える**心理的な消沈と束縛感**を、味わっていたのでしよう。

そうです。巨大な帝国の捕囚となり、バビロンの宗教や文明、軍事力を目の当たりして、その支配力に**押しつぶされ**そうになります。でも**真の神**は違います。**真の神はすべてを支配**し、自由であり、何処であろうとも**救いの御業**を行って下さるのです。信じて聞き従う者に、**真理**を示し、**目標と希望**を与え、**力強く導いて**下さるのです。困難にくじけることはないのです。

【結】 御言葉による神との出会い

では私たちは、その**真の神**と、どのようにして**出会う**ことができるのでしょうか。エゼキエルは特別な霊的体験を通して、神の語りかけを聞くことができました。「さあ、私が語ることを、**民に語り聞かせなさい**」「私が与える言葉を**食べて**、語りなさい」(2:8、3:1)。神の言葉を食べて語るとは、自分の体内で**消化して語る**ということでしょう。それが**預言者エゼキエルの使命**なのです。その預言者を通して語られる神の言葉を信じて、**聞き従う時に**、私たちは**真の神に出会う**のです。

私たちは今エゼキエル書を読んでいます。ここに記されている言葉を、昔、神がエゼキエルを通して語られた言葉なんだなあと思いながら読むのではなく、神が**今、私に語りかけておられる命の言葉**として聞き、神に**応答**していくこと、そこに、神との出会いが生まれるのです。

皆さんは今日のエゼキエル書 1 章 1 節から 21 節に記されている言葉の**どの言葉**から、今の自分に語りかけて下さって居る神の言葉を聞き取られますか。私が今聞き取った**私への御言葉**は、5節

の「またその中には、**四つの生き物の姿**があった」です。先程も説明しましたように、四つの顔を持つ不思議な生き物。獅子は**勇気**を、牛は**力**を、鷲は大きな翼で大空を駆け巡る**自由**さを。人間の特色は、**理性**、**知恵**でしょうか。更に仕事をする**手**、四方に動ける**足**、更により自由に動き回れる**車**までついている生き物です。

捕囚生活で意気消沈している若きエゼキエルに、新しい使命を与えて**奮い立たせた生き物**が四つも示された——これは東西南北、四方八方に、この**神の働き**がもたらされているということですね。即ち、バビロンの**ケバル川のほとり**だけでなく、**今**、川越市石原町の**此処**にももたらされているという、神の語りかけだと、私は聞き取りました。何と嬉しいことでしょうか。私は 84 才になり耳は遠くなり、忘れっぽくなり、果すべき仕事の量も減ってきました。喜美子もすっかり弱ってきました。でも四つの顔や翼や手足を持つ**神の自由な働き**が、この私たち夫婦にも行われているのだと、エゼキエルを通して神が、**今**語りかけて下さって居るのです。此処にお集りの皆さん一人一人にも、**真の神の働き**は行われているのです。何と嬉しいことでしょうか。何と励まされる語りかけでしょうか。感謝して、心から讚美歌を歌おうではありませんか。皆さんも、後でよくよく読み返して、各自に今日語りかけている神の言葉を受け取って、感謝の応答をなさって下さいますように。そしてこの一週間を、ベストを尽くして生きてまいりましょう。

祈ります：神さま、今日も素晴らしい御言葉を語りかけて下さり感謝します。或る方はあなたの光を、また火を見るでしょう。希望をお与え下さい。熱い心をお与え下さい。霊的感動をお与え下さい。そしてまた来週、礼拝に集って賛美を捧げることが出来ますようお導き下さい。主の御名によってお祈りします。

アーメン